

『古事記』・『日本書紀』と

芥川龍之介の小説『老いたる素戔鳴尊』

“Kojiki”, “Nihonshoki” and “Oitaru Susanonomikoto”

Written by Ryunosuke Akutagawa

赤松 優香

Yuka AKAMATSU

一、はじめに

『古事記』と『日本書紀』は日本の歴史書であるが、神話や物語、歌謡を多く載せ、文芸性も高い。その影響は後世に及び、近代における芥川龍之介の素戔鳴尊に関する小説も、その事例の一つである。

本稿で取り上げる芥川龍之介の『老いたる素戔鳴尊』は元々、『素戔鳴尊』という題であった小説の後半部である。『素戔鳴尊』は、「大阪毎日新聞」に大正九年三月三十日から六月六日までの間（東京日日新聞には同日から六月七日までの間）、複数回におよぶ休載を経、全四十五回にわたって連載された。その三十五回までを削除し、

三十六から四十五回部分を独立させ、『老いたる素戔鳴尊』と改題して『春服』（一九二三、春陽堂）に収録。一九七七年の岩波書店発行、全二十四巻からなる『芥川龍之介全集』第六巻にも収められている小説である。本稿において単に『素戔鳴尊』という場合は一回から三十五回分までのことを指している。

『老いたる素戔鳴尊』について、長野誉一氏は『古事記』のスサノヲ関係記述の影響を受けていることを指摘している^{注1}。妥当な見解であり、葦原醜男がスサノヲから受ける蜂の室、蛇の室の試練の記述など、『古事記』の影響は明らかである。しかし、芥川は『古事記』のみならず、『日本書紀』のスサノヲ関係記述の影響も受けていると考えられる。そのことを具体的に証明するのが本稿の目的である。

二、『古事記』・『日本書紀』の『老いたる素戔嗚尊』への影響
この節では、節題に示したような影響をa、bの二点から具体的に指摘する。

a、登場者名の表記

『古事記』・『日本書紀』と『老いたる素戔嗚尊』に見られる登場者名の表記を表にすれば、次のとおりである。『日本書紀』と『老いたる素戔嗚尊』と共通する表記は双方に○印を付して示す。『老いたる素戔嗚尊』の無印の表記は『古事記』と共通、またはほぼ共通する表記である。

古事記	日本書紀	老いたる素戔嗚尊
須佐之男	○素戔嗚	○素戔嗚
須世理毘賣		須世理姫
葦原色許男	○葦原醜男	○葦原醜男
櫛名田比賣	奇稲田姫	櫛名田姫
足名椎	脚摩乳	足名椎
手名椎	手摩乳	手名椎
八島士奴美		八島士奴美
天照大御神	○大日靈貴	○大日靈貴

右の表から、『古事記』と共通またはほぼ共通する表記が五、『日本書紀』と共通する表記が三となっており、素戔嗚や葦原醜男といった小説の中の重要者の名、そして天照大御神の別伝の名の大日靈貴の表記が『日本書紀』と共通することがわかる。
このことから、芥川が『古事記』のみならず、『日本書紀』を参照したことが分かる。

b、朝鮮伝来の刀剣

素戔嗚は、『日本書紀』では朝鮮半島との関わりを強く持つ。巻第一神代上の第八段の一書第四には、素戔嗚は子五十猛とともに新羅に行き、日本に帰ってきたという記述がある。続く、第八段の一書第五にも素戔嗚の言葉に「韓郷」の名が見られる。そのほか、『日本書紀』では素戔嗚が用いた朝鮮由来と考えられる韓鋤の剣も見られる。それは第八段の一書第三の記述で、次のとおり。本文は『日本古典文学大系 日本書紀 上』^(注2)に拠る。

素戔嗚尊、乃ち計ひて、毒酒を醸みて飲ましむ。蛇酔ひて睡る。
素戔嗚尊、乃ち蛇の韓鋤の劍を以て、頭を斬り腹を斬る。

素戔嗚が八岐大蛇を斬るときにの剣として「韓鋤の劍」が登場している。

一方、芥川の『素戔嗚尊』では素戔嗚が「高麗劍」を佩いている。さらに『老いたる素戔嗚尊』では葦原醜男が「高麗劍」を佩くほか、初出では素戔嗚も「高麗劍」を佩く描写が末尾にあり、「素戔嗚は

高麗劍を提げた儘、眉の上に手をかざして、遙にこの独木舟の帆を眺めた」と記されている。

これは素戔嗚が眠っている間に逃げ出した葦原醜男に気がつき「高麗劍」をもって須世理姫と葦原醜男のもとへと急ぐ場面である。『老いたる素戔嗚』と改題された際に、「高麗劍」での描写は『日本書紀』巻第二神代下に記述のある「天の鹿兒弓」での描写へと改変された。

「高麗劍」については、『日本国語大辞典』^(注3)には「高麗伝来の、柄(つか)の頭が鑲(かん)になつてゐる大刀。古く西域地方に発達し、中国に伝わつて、龍雀大環と呼ばれた。古墳時代から奈良時代の主要な刀劍の様式。」と記述がある。芥川は初出段階から『日本書紀』の朝鮮伝来と考えられる「韓鋤の劍」を参照して、古墳時代から奈良時代の主要な刀劍の一つである「高麗劍」を用いた可能性が高く、芥川の『日本書紀』への意識がうかがわれる事例と考えられる。^(注4)

三、『日本書紀』と『老いたる素戔嗚尊』の構想及び 素戔嗚の造型

小説の構想については、「素戔嗚尊——1) Revolt 2) Maturity 3) Elder」という芥川のメモがある。^(注5)つまり、反逆・成熟・老年ということになる。^(注6)芥川はスサノヲを小説の題材にするにあたり、スサノヲの変貌を成長の観点で捉えたのである。その構想は『日本書紀』巻第一神代上の第五段一書第六に見られる「是の時に、素戔

嗚尊、年已に長いたり。復八握鬚髯生ひたり。」という表現に拠るところが大きいと考えられる。それは次のようにイザナキの言葉の直後にある。

「天照大神は、以て高天原を治すべし。月讀尊は、以て滄海原の潮の八百重を治すべし。素戔嗚尊は、以て天下を治すべし」とのたまふ。是の時に、素戔嗚尊、年已に長いたり。復八握鬚髯生ひたり。

『古事記』には、「速須佐之男の命、命さしし國を治めずして、八握須、心前に至るまでに啼きいさちき。」とあり、西宮一民『古事記』^(注7)には「『こころさき』は、心臓の辺。長いあごひげ(須)は『鬚』の古字)がそこにまで達するとは、成人に達した年齢をいう。」と頭注に記す。『古事記』の本文に拠ればそう解するのが妥当であろう。しかし、『日本書紀』の方には、「年已に長いたり。」の直下に「復八握鬚髯生ひたり。」とあり、日本古典文学大系『日本書紀 上』の頭注六に「長く髭の伸びた老人の貌。」と記している。『日本書紀』の本文に拠れば妥当な捉え方である。^(注8)芥川は『日本書紀』のこの本文を参照し、それを上掲頭注のように捉えた時、後に『老いたる素戔嗚尊』に具現化する素戔嗚尊の老年をテーマとする小説構想に思い至つたものと考えられる。芥川が『素戔嗚尊』の「十一」の章の思兼尊に「年長」と「髯」の言葉を用いて、次のように記していることは、『老いたる素戔嗚尊』を予想させて重要である。引用は『芥川龍之介全集 第六巻』^(注9)による。

この連中は彼の味方が、彼を首領と仰ぐやうに、思兼の尊だの、手力雄の尊だのと云ふ年長者に敬意を払つてゐた。(中略)／尊はもう髪も髯も白くなつた老人ではあるが、部落第一の学者でもあり、予ねて又部落第一の詩人と云ふ名誉も担つてゐた。

芥川がこの部分を執筆した時には、すでに『日本書紀』の上掲記述を知つていたことを物語つてゐる。

「年長」は年齢が上であることを表すけれども、文脈によつては敬意がこもる場合がある。芥川は先掲『日本書紀』の「年已に長いたり。」の記述に敬意がこもつてゐると読んだものと思われる。そして、素戔鳴尊へのその敬意の心を『老いたる素戔鳴尊』では一番最後に結晶させるのである。そのことを小説の内容に即して述べよう。

まず、素戔鳴の老いの身体的表現を確認すれば、次のとおり。

- ・彼は既に髪の色が麻のやうな色に變つてゐた。が、老年もまだ彼の力を奪ひ去る事が出来ない事は、時時彼の眼に去来する、精悍な光にも明かであつた。^(註10)
- ・彼は髯だらけの顔に、愈皺の数を加へ
- ・あの白髪の素戔鳴
- ・素枯れた蘆の色をした髪は、殆ど川のやうに長かつた。

『老いたる素戔鳴尊』は、娘の須世理姫と葦原醜男との結婚を許さない素戔鳴が葦原醜男に次から次へと試練を与えるものの、須世理姫の協力を得て葦原醜男はそれを乗り越える。そして、須世理姫

と葦原醜男は独木舟に乗つて、素戔鳴のもとからの脱出をはかる。その様子を見ていた素戔鳴の「眼には微笑に似たものが浮かび出した。微笑に似た、――しかし其処には同時に又涙に似たものもないではなかつた。」とその内面の投影描写がある。そして「さも堪へ兼ねたやうに涙よりも大きい笑ひ声を放つ」て須世理姫と葦原醜男を次のように祝（こほ）ぐのである。

- ・「おれはお前たちを祝ぐぞ！」
- ・「おれよりももつと手力を養へ。おれよりももつと知恵を磨け。おれよりももつと、……」
- ・「おれよりももつと仕合せになれ！」

この直後に、芥川は『老いたる素戔鳴尊』で最も言いたかつた、老いたる素戔鳴が到り着いたところを、「わが素戔鳴」という言葉に表れているように、敬意をこめて次のように記し、この小説を闇筆している。

彼の言葉は風と共に、海原の上へ響き渡つた。この時わが素戔鳴は、大日靈貴と争つた時より、高天原の国を逐われた時より、高志の大蛇を斬つた時より、ずつと天上の神神に近い、悠然たる威嚴に充ち満ちてゐた。

この最終部分は、初出では「彼の言葉は風と共に、限りない海原の空へ揚つた。この時わが素戔鳴は、彼の多端な生涯を通じて、如何なる瞬間よりも偉大であつた。」とある。老いたる素戔鳴尊は、

須世理姫、葦原醜男との関係を通して、「天上の神神に近い、悠然たる威厳に充ち満ち」た存在へと高められているのである。

芥川は『日本書紀』巻第一神代上の第五段一書第六の「素戔鳴尊、年已に長いたり。復八握鬚髯生ひたり。」を参照し、そこからインスピレーションを受け、老いたる素戔鳴尊を見事に描ききったと言えよう。

芥川が『古事記』のみならず『日本書紀』を参照したことは『素戔鳴尊』の方にも言えることであるが、その考察は多岐にわたるため、別稿に記す。

(二〇二〇年十月二十七日)

(注)

- 1 長野嘗一『古典と近代作家——芥川龍之介』有朋堂(一九六七)
- 2 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系 日本書紀上』岩波書店(一九六七)
- 3 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』小学館(二〇〇二)
- 4 芥川が素戔鳴尊関係以外に『日本書紀』に言及している箇所が見られ、参考になる。『芥川龍之介全集第二卷』岩波書店(一九九五)の「貉」九七頁に垂仁紀八十七年、推古天皇三十五年二月の記事に基づく文章がある。同じく全集第十六巻の「柳田国男・尾佐竹猛座談会」二九九頁に「『日本書紀』の中に、天智天皇の御宇ぎょうかなんかに、水中に人間みたいなも

のがいる話がありますね。」という発言がある。

- 5 『芥川龍之介全集 第二十三巻』岩波書店(一九九八)
- 6 清水康次「『野生』の系譜」芥川・理智と抒情『有精堂』一九九三
- 7 西宮一民『新潮日本古典集成 古事記』新潮社(一九七九)
- 8 「年已に長いたり。復八握鬚髯生ひたり。」は素戔鳴尊が老人・長老の貌をしていたことを表すと捉えることについて、『日本書紀』巻第四の綏靖天皇即位前紀に、四十八歳の綏靖天皇の庶兄いづねの手研耳命が「行年已長いて」と記されていることが参考になる。

9 『芥川龍之介全集 第六巻』岩波書店(一九九六)

10 芥川の構想メモに書いてあったBaderの日本語訳の「老年」の語が、この部分に用いられている。

(付記)

本稿を成すに、鈴木武晴教授のご指摘、ご指導をいただいた。

受領日…二〇二〇年十月二十八日
改訂日…二〇二〇年十二月十八日
受理日…二〇二〇年十二月二日